

ゴーリキイの家系について

松 本 忠 司

はじめに

作家以前のマクシム・ゴーリキイに関する伝記的研究には、いまだ未解決の問題が少なくない。なかんずく作家の《家系》については、これが下層庶民の家系であるために調査にきわめて多くの困難が伴い、またその近親者についても資料が乏しく、従来は三部作その他の自伝的作品や書簡などにおけるゴーリキイ自身の回想的言及のほかには、イ・グルーズデフ、ヴェ・ゾロトニーツキイその他によって発見された若干の記録類、および同時代人たちの回想記が存在するだけであって、しかもこれらの資料自体たがいに矛盾するところが多く、その実相は謎に包まれていたといつてよい。したがって、さきに私が発表した『ゴーリキイ研究1 作家への道』（小樽商科大学人文科学研究会，1968年3月，および理想社，1968年9月）においても、作家の近親者に関する叙述にあたっては、——論文の構成上、深く追求することは課題とされてはいなかったけれども、——たとえば、「確かなところはいまだ知りえないが」、あるいは「具体的な事実を示す資料がいまだ発見されていない現在、その真相はわれわれの確かめ得ないところである」とあるように、問題の解明が今後に残された課題であることを強調されねばならなかった。

最近、ゴーリキイ市において新たに、教会記録類をふくむ、作家の近親者に関する新資料が発見されたが、これらは上述の問題の追求にとって貴重な手がかりを与えるものである。この資料を利用しつつ、従来知られていた諸資料や作家自身の発言によって補いながら比較検討し、ゴーリキイの家系研究における問題点の所在を明らかにし、部分的にはあるけれど、それらの問題を解明しようとするのが私の報告の課題である。

I Максим Савватиевич Пешков

(1) 生いたち

「父方の祖父は将校であったが、部下に対する苛酷な仕打ちのために、ニコライ

一世によって降等させられた。これはきわめて峻厳な性格の人で、私の父は、十歳から十七歳までのあいだに、五回も親のもとを逃げ出そうとしたほどだった。最終回目に、父は身内のもとから永久的に逃れることに成功した、——父はトボースクからニージニイまで徒歩で辿りつき、ここで室内装飾師のところに弟子入りした。」(「自伝」, 傍点——原文斜体)

ゴーリキイがその父、マクシム・ペーシコフについて語っている言葉としては、上に掲げた1897年の文章と、『幼年時代』(1913年)の中で祖母の回想からの聞き覚えとして記されている叙述にほとんど尽きるといってよい。双方の記述に共通するところは——彼の父が、(i) かつて将校であったが部下に対する不当な処置のために降等させられて、シベリヤに送られた兵士の息子であること、(ii) シベリヤで生まれ、幾度か親のもとから逃げ出すことを試みたこと、の二点であり、喰いちがう点は、(iii) いかなる経緯を辿ってニージニイ・ノーヴゴロトで暮らすようになったかということである(『幼年時代』には次のように述べられてある、——「……父の母は早くに死んだ。父が数えて九歳のとき、祖父も死んでしまった。教父にあたる指物師が彼を引き取り、彼をペルミ市の職人同業組合に登録して、自分の職業を仕込みはじめた。しかし父はそこからも逃げ出し、盲人の案内をつとめて定期市をめぐり歩いた。十六歳のときニージニイにやって来た……」)

マクシム・ペーシコフの生年は、アストラハン市のカザン教会に保存されている教会戸籍簿に「1871年、三十一歳で死亡」と記載されていることから、1840年と推定されるが、これはニコライ一世の治世下(1825～1855)の年であり、ゴーリキイの祖父が「ニコライ一世によって降等させられた」とする「自伝」における記述と符号を一致するものである。

ところで、ニコライ一世時代における兵役とはどういうものであったか。当時、義務としての兵役を課せられていたのは、農奴をふくむ農民、職人、町人のみであり、貴族、官吏、僧侶および一定額以上の納税者はこの義務を免ぜられていた。徴兵にさいし、国は県知事を通じ各市町村の身分別自治組織に対して壮丁人口の一定比率による徴兵を命じ、その連帯保証のもとに兵士を集めた。ここでいう連帯保証とは、換言すれば、各種自治組織において支配的位置にある人びとの個人的裁量に委ねられるということでもあり、彼らが支配権を握っている世界の環境清掃の意味から、極貧者、孤児、前科者その他がまず第一に徴兵のいけにえとして供せられるということも稀ではなかった。兵役年限は二十五年にも及んだ。したがって、兵士としてその居住地を一度離れた人間は、

特別な場合を除いては、ふたたび故郷の土を踏むこともなく、戦場に、僻遠の駐屯地に、あるいは除隊後の屯田地にその老骨をさらすことで生涯を終えなければならなかった。このようにして徴兵された一般兵卒が将校の階級に昇進することは、きわめて例外的なことであった。将校になるのは、ふつう、兵役義務を免ぜられていた階級の出身者に限られていた。貴族や金持ちの子弟は、士官学校その他の軍人養成機関に学ぶか、あるいは普通中高等教育を受けたのち志願して、軍務につくその最初から見習士官もしくは下士官として職業軍人の経歴を出発するのであった。彼らが自分の屋敷農奴を従卒として伴って任地に赴き、家庭から多額の仕送りを受けながら、軍隊の中でも《優雅な生活》を享楽することができたということは、プーシキン、レールモントフ、トルストイの筆によっても良く知られているところである。

ゴーリキイの祖父が、このような上流階級出身の将校であったとは考えられない。1890年代にゴーリキイの主治医であったヴェ・ゾロトニーツキイは、作家の近親者の言葉として、サヴァーチイが「シベリヤ農民の出身」であると述べている。これが事実か否かは確かめ得ないが、いずれにせよ、ゴーリキイの祖父が将校であったことがあるとすれば、それは長期にわたる兵卒勤務を経て将校に、それもおそらくは将校の最初の階級に数えられた下士官に昇進したものと考えられよう。

「自伝」によれば、ゴーリキイの父はトボースクから徒歩でニージニイまで辿りついたという。トボースクはかつてシベリヤの州都であったし、ロシア帝国の東方経略の前哨基地としてロシア人によって開発された最初のシベリヤ都市の一つであり、カザック屯田兵や、鉱山師・毛皮商人・探検家など、富と海洋への道を求める冒険家たちの町として知られていた。この町にはもう一つの《栄光》があった。それは監獄と流刑である。ここには大きな移送監獄を併設する《流刑囚に関する中央政府機関》が置かれていて、自由意思による移住者以外はすべてこの機関の名簿に登録されていた。軍務に服する者も同様であった。したがって、元将校で、シベリヤに送られた兵士であるゴーリキイの祖父、サヴァーチイ・ペーシコフの名は当然この名簿の中に記載されていなければならない。しかし、エヌ・ア・ザブルダーエフの研究においても、「サヴァーチイ・ペーシコフは（文書保管所の協力者たちの連絡によると）トボースクの名簿には記載されていない」とされている。

ザブルダーエフの協力者たちの調査に疎漏があったとは考えられないが、しかし、彼らは《ペーシコフ》という姓に囚われて、これをひたすら忠実に追求

したのではあるまいか。調査方法についてザブルダーエフはまったく触れていないが、もしもこの姓名の追跡のみ終始したとすれば、それが発見されなかったとしても、私にはさして不思議とは思われない。というのは、かねてから私は《サヴァーチイ・ペーシコフ》という姓名の人物の存在については疑問を抱いているからである。《徒歩で行く人》という意味を持つこの姓は、ゴーリキイの先祖が代々使用していたというものでなく、作家の父、マクシムが親のもとを離れて独立の生活をいとなむようになってから、自分で付けた苗字ではあるまいか、という疑念が私の中では消えないのである。早くに母をうしない、峻厳粗暴な父親の折檻のもとに明け暮れ、ごく幼少のときから家出を試みなければならなかったという少年が、困難な道を踏み越えてヨーロッパ・ロシアに辿りついたとき、忌むべき記憶にみたされた過去から解放され、無限の可能性を秘めた新生活への期待に胸おどらせ、自分の中に新しい生命力の躍動を感じ取ったとして不思議であろうか。そしてこの感激が、過去との絶縁の意味で従来の姓を投げずてさせ、新生活の扉の前まで自分を導いた、ほかならぬ《徒歩》にちなんだ姓を名乗ることを少年に決意させたとして不思議であろうか。——これは、もちろん仮説にすぎず、推測の域を出るものではない。しかし、この仮説を一応念頭にとどめてトボースクの名簿を吟味するなら、おのずと吟味の手続きも変わってこよう。《ペーシコフ》という姓が記載されていないとすれば、まず第一に、《サヴァーチイ》という名を拾い上げなければならない。第二に、数人か数十人かのサヴァーチイたちの中からトボースクおよびその周辺にながく定住した者を選び出す。これは軍籍にある者とは限らない。除隊後、駐屯地の周辺に土着した兵士の数は少なくないからだ。そして第三に、それぞれのサヴァーチイが住んだ地域の教会その他の戸籍簿を調べて、1840年前後の記録の中から《サヴァーチイ某の息子マクシムの洗礼》の項目を探し出さなければならない。この方法には多くの困難が伴うであろうし、結果は徒労に終わるかも知れない。しかし、偶然の僥倖にでも恵まれぬかぎり、さしあたり、これ以外にゴーリキイの祖父の存在を確かめようがないと、私には思われる。

マクシム・ペーシコフがニージニイに辿りついた経緯も、依然、謎に包まれている。「自伝」では、彼は十七歳まで親のもとに暮らしていたとされているが、『幼年時代』では——わずか九歳までである。しかも、後者では、マクシムはいったんペルミ市の神父のもとに引き取られ、やがてそこを逃げ出して、

十六歳のときにニージニイに到着したということになっている。しかも、一人ではなく、「盲人の案内をして」である。

ゴーリキイの誕生および後にふれる肉親の結婚に関する教会記録は、マクシムが《ペルミの町人》であることを指摘している。しかし、これらの記録はペルミで作成されたのではなく、ニージニイの教会で、マクシム自身の証言に基づいて作成されたものである。さらに、マクシムの教父が彼を《ペルミ市の同業組合》に登録したという『幼年時代』の叙述にしたがうなら、彼は《町人》(мещанин)ではなく、《同業組合員》(цеховой)と記されていなければならなかった。あるいは、マクシムが教父のもとを逃げ出したということが、その資格を失なうという結果となったのであろうか、おそらくは、旅券もないままに。

マクシムが「盲人の案内をつとめて定期市をめぐり歩いた」という『幼年時代』における記述も一考に価する。ここでいわれる《盲人たち》(слепые)とは何であろうか。ゴーリキイの祖母の回想では、文字どおりの《盲目の》芸人をさしていた、——「あの男はまた珍しいほど上手に踊ったし、歌もいいのを知っていた。めくらたちに付いて廻ったあいだに習いおぼえたものよ。めくらというものは——誰よりも上手な歌い手だからのう」と。しかし、当時において《слепые》という言葉は、本来の意味のほかに、《слепой паспорт》が偽造旅券のことであったのと同様、《無旅券者》、《浮浪人》、《逃亡者》という意味でも使われていたし、またシベリヤ生活者のあいだで通用していた《лётный》、あるいは《обратник》と同義語であった。マクシムがニージニイに辿りついたといわれる年(1856～1857年)は、クリミヤ戦争の敗北と、徹底した農奴制主義者であるニコライ一世の死とによって、農奴制ロシアの土台がはげしく揺れ始めた時期であった。農民一揆が欧露の大半の県で激発し、辺境勤務の軍隊の中にさえ不穏な動揺があり、シベリヤ各地の監獄や流刑地では脱走事件が相次いだ。脱走囚たちはヴォルガ河畔に辿りつくと、波止場人足や貧民窟で、たやすく他人の旅券を入手できた。このような意味での《слепые》にマクシム・ペーショフ少年が会える可能性は充分にあり得たとするザブルダーエフの指摘は検討に価するであろう。

マクシムはニージニイで《室内装飾師》のところに弟子入りした。親方の名は、作家によっては明らかにされなかったが、その後の調査の結果、こんには次のことが確かめられた、——ニジェゴロート手工業管理所には、室内装飾師の独立の部門はなく、この仕事にたずさわる者の一部は指物職同業組合に含められ、他の一部は、ゴーリキイの母方の祖父、ヴェ・カシーリンが理事長

をつとめていた染物職の中に登録されていた。染物職同業組合員で教会や富豪の邸宅の室内装飾の仕事をしていた人物にチモフェイ・バザーノフがいた。彼はカシーリンの義弟にあたり、彼のもとでゴーリキイの父が室内装飾の仕事を初めて習うことになった。

マクシムが二十歳になった1860年ごろ、彼は「もう一人前の腕のいい高等家具職人であり壁紙職人であり室内装飾師であった。」当時、ニージニイの人びとは、その天才技倆によって伝説的に賞揚された名工の名にちなんで、マクシムを《第二のクリビン》(второй Кулибин)と呼んだといわれる。

(2) 結婚およびその周辺

『父と母は《駆け落ち》をして結婚した。というのは、祖父が、もちろん、素性の知れぬ、将来の見込みのない男なんぞに、自分の可愛い娘をくれるわけにはいかなかったからだ。』(「自伝」)

ゴーリキイが祖母の回想を通じて記憶していた彼の両親の結婚は、きわめてロマンチックな、波瀾万丈の物語であった。『幼年時代』によれば、——相思の男女が家族にかくれて《駆け落ち》をし、秘密裡に教会で婚礼を行なおうとする。祖母のひそかな援助。《駆け落ち》の目撃者による密告。祖父の激怒。追跡。そして婚礼ののちも、若嫁の父は若夫婦を呪って家には寄せつけなかった。……先年物故したイ・グルーズデフのような、すぐれたゴーリキイ研究家をふくめて、多くの研究者がこの物語をほとんど無条件的に採用し、その信憑性については疑いを抱かなかったようである。しかし、両親の婚礼に関する祖母の回想を導き出したあとに、ゴーリキイが付け加えている次の一節を見落としてはなるまい、——「……祖父は母の婚礼を全然ちがったふうに描いてみせた。彼はこの結婚に反対で、婚礼ののち母を家には寄せつけなかった。けれども彼の話では、母はこっそり婚礼を行なったのではなく、教会には彼も列席したというのだった。どちらの話が本当なのか、私は祖母に訊きたくなかった。なぜなら、祖母の物語のほうがヨリ美しくて、この方がヨリ多く私の気に入ったから。」

教会の記録は祖父の言葉の正当性を証明している。婚礼と披露宴は、公然と、カシーリン家の人びとの列席のもとに行なわれた、——《1863 г. октября 27 дня были повенчаны: жених пермский мещанин Максим Савватиев Пешков, 23 лет православного вероисповедания, первым браком, невеста — нижегородского цехового Василия Васильева Каширина дочь девица Варвара Васильева 18 лет, первым браком. Поручители: со стороны

жениха—нижегородский цеховой Миханл Васильев Каширин и темниковский мещанин Василнй Кунникеев, со стороны невесты—нижегородский цеховой Яков Васильев Каширин и нижегородский купец Яков Иванов Котельников»

ここに見るように、カシーリン老人ばかりでなく、彼の息子たち——《盗まれた》妹の奪回のために銃を持ってマクシムを追いかけたというミハイールとヤーコフも、新郎新婦のそれぞれの側の証人として婚礼の席に臨んでいたのである。

いま一つの記録、結婚当事者間に血縁関係のないことを証明する「婚姻審問」(Брачный обыск)によれば、マクシムとヴァルヴァーラの結婚は「相互の同意と希望」によるものであり、「新婦はその両親より許可を得ている」ことが確認される。さらに、挙式当日までに三度にわたって行なわれる合意確認については、《По троекратному оглашению, производимому в нашей Успенской церкви сего октября 20, 22 и 27 числа, препятствий никаких не объявлено》,《по сему бракосочетание вышеозначенных лиц предположено сего октября 27 дня 1863 года, в означенной церкви в указанное время при посторонних свидетелях》とあるように、「いかなる障壁も表明されない」ことが強調されている。この書類には新郎、新婦、新婦の父および双方の証人によって署名されている。

これらの記録は、祖母のものがたる《駆け落ち》の話が、あくまでも物語であって事実をつたえるものではないことを立証するものである。そして、この話は祖母によって完璧とっていいほど見事な造型を与えられた芸術的形象であるがゆえに、孫の記憶の中に、ほかならぬ自分に生命をもたらししたところの、愛し合う男女のその愛の美しさ、激しさ、厳しさの規範として、《事実》よりもはるかに深い《真実》として刻みつけられたのであった。

ペーシコフ夫妻の結婚後の生活について、『幼年時代』における祖母の回想はほぼ次のようなものである、——結婚後、初めの二週間ばかりは、若夫婦がどこで暮らしているか、彼女にも知れなかった。やがて、娘からの連絡を受けて、彼女は家の者の目を盗んで、「出来るだけのもの」を若夫婦のところへ運びつけた。こうして長い月日がたった。1868年2月11日、娘とその夫は結婚以来はじめて父親の家を訪れた。この日は特別の日であった——謝肉週間の最後の日で、日頃つもり重なった仲違いや紛争をさっぱりと洗い浄める日と定められている《赦免の日曜日》なのである。頑固な老人も若い二人の結婚を容

認しないわけにかなかった。娘は臨月も間近い身おもになっていた。和解が成立して、若夫婦は老人の家に同居することになり、それからまもなく男子が出生した。これがアレクセイ、未来の作家ゴーリキイである。

以上のことから、従来は研究者のあいだでも、アレクセイがペーショフ夫妻の最初の子であるかのように考えられるのが常であった。しかし、教会記録は、結婚一年後から夫妻のもとには、ほとんど毎年のように子供が生まれたことを示している。これによると、ゴーリキイは七人兄弟の四番目、三男であった(別表を参照されよ)。しかし、アレクセイのほかはいずれも短命で、どの子も満一歳の誕生日を迎えることなく世を去った。

結婚後のペーショフ夫妻を、ヴァシーリイ・カシーリンが「家に寄せつけなかった」という事実はない。彼は、ウスペンスキイ坂にあった自分の屋敷内の職人住宅の一部を若夫婦に使用させていた。1864年2月、カシーリンはコバーリハ通りに大きな屋敷を買ってそこに移ったが、以前の住居はペーショフに使わせていた。1864年の冬から翌年末にかけて、およそ一年間、ペーショフ夫妻はニージニイを離れて、近郊の、コールチン汽船会社の作業場で暮らしていたようだが、第二子エカチェリーナが生まれる前には、ふたたびウスペンスキイ坂で生活しており、さらに、第三子ヴァシーリイの誕生に関する教会記録によれば、1866年12月以前に、彼らはすでにコバーリハ通りのカシーリン家に同居していたことが明らかとなる。新生児にヴァシーリイという名を与えたことは、舅に対するマクシムの敬意のしるしと考えられよう。このときからアストラハンに移住するまでの五年間、ペーショフはこの家で暮らしている。

ペーショフが1864年から65年にかけてニージニイを離れていたという事実の背景には、おそらくゴーリキイが祖母から聞かされたことがなく、したがってどこにも触れていなかった一つの事情が介在していたと思われる。

最近ゴーリキイ市で発見された資料の一つに、マクシム・ペーショフが営業免許に関してニージニイ・ノーヴゴロト市長に提出した、1864年10月4日付けの《嘆願書》がある。これによると、マクシムは壁紙職の仕事場を開き、手工業管理所から営業免許を受けるために必要な所定の手続きをとったのであるが、同業組合理事長に握りつぶされたというのである。市長は手工業管理所にこの問題について調査と報告とを命じたが、手工業管理所の役員たちは、ペーショフが許可なく営業を行ない、下職や徒弟を雇っていたと非難し、罰金、仕事場の閉鎖、制作物および道具の没収という処分を決定した。

同業者の中には、マクシムのような有能な競争者の登場に不安を感じ敵意を

抱く人びとがいた。また手工業界全体としては、ちょうどこの時期、ヴァシーリイ・カシーリンが手工業管理所会頭の地位を争って敗れた直後でもあったので、管理所の役員たちの眼には、マクシムの業界進出がカシーリンの捲土重来の前ぶれとも映ったのである。かくしてマクシムは《同業組合員》の資格を得ることなく、《町人》という身分のまま、独立の営業を断念し、コールチン汽船会社専属の職人として働くようになった。

(3) アストラハン——終焉の地

ペーシコフの生活は楽ではなかった。自分の店を持つという希望は断たれ、愛児の上にはつぎつぎと死が襲いかかった。しかし、四番目の子供、アレクセイだけはことなく満一歳の誕生日も過ぎて、すくすくと成長していった頃から、ペーシコフ家に対して運命がほほ笑みかけ始めたように思われた。1839年の後半ともなると、マクシムはコールチン汽船会社の中では、その職人としての技倆ばかりでなく、思慮分別においても注目すべき人物として衆目の一致するところとなっていた。裁判所法が改正されて陪審制が採用された直後の1870年、彼は会社と職人たちの推薦により、ニジェゴロート地方裁判所の陪審員に選ばれた。翌年もひきつづき、陪審員として法廷記録に彼の名が見られるが、6月以降の記録にはもはやない。この頃、ペーシコフ家はアストラハンに移住したのである。

のちに祖母はゴーリキイにものがたった、——「まもなくあの男はアストラハンに行くことになった。夏、あそこへツァーリさまをお迎えするので、おまえのお父っつあんが歓迎のアーチを建てるようにと頼まれたのだよ。あの子らは一番の汽船で出かけて行った。」このことに関連し、ゴーリキイはイ・グルーズヂェフにあてて書いている、——「私の父は歓迎アーチの建造に何らかの関与をしていたはずだ、と思います。というのは……ペーシコフはコールチンの支配人だったから。」

当時のアストラハンの地方紙は、アレクサンドル二世歓迎の記事の中で、埠頭に建てられた「ロシア風の優美な凱旋門」についてふれている、——「基底部分にはアストラハン地方の湖沼の塩がうず高く積み上げられ、緑のふさふさした葡萄が円柱とアーチにからみつぎ、模型の船舶と漁撈用具と、それを蔽う金色の網とその中にきらめく銀色の魚とがアーチの正面全体を絵のように飾っていた。」

だがマクシムは、アーチの完成を見ることはなかったであろう。この年、ヴォルガ流域をコレラの流行が襲った。それは上流のヤロスラーヴリ県ルイビン

スクから始って、沿岸にひろがりながらアストラハンへと流れ寄せてきた。7月16日には、アストラハンで被患者260名、そのうち死者は170名に達した。コレラはペーショフ家にも入りこみ、最初、三歳のアレクセイにとりついた。マクシムは息子のそばに付きっきりで看病に没頭した。ヴァルヴァーラは出産を間近にひかえて産褥にあった。ニージニイから祖母が救援にかけつけた。しかし、アリョーシヤが高熱から醒めたとき、父親が罹病し、7月29日、三十一歳の若さで世を去った。

葬式ののち一カ月ほどして、ヴァルヴァーラは祖母に付き添われ、アリョーシヤと、夫の死後二日目に生まれた赤ん坊を連れてニージニイに向かった。父の思い出のためにマクシムと名付けられた新生児は、ヴォルガをのぼる汽船の中で息を引き取った。こうして、マクシムとヴァルヴァーラの子供たち七人のうち、生き残ったのはただ一人——アレクセイだけとなった。

II カシーリン家の人びと

(1) Василий Васильевич Каширин

「母方の祖父は、ヴォルガの曳き舟人足としてその経歴を始めた。三年後にはすでにバラフナの商人ザヨーフの持ち舟の船頭取締をつとめるようになり、その後、織物染色の仕事にとりかかり、金を儲け、ニージニイに染物工場を開いて、手びろく商売をした。まもなく彼は市内に、いくつかの家作と、染物の仕事を三つ所有して、同業組合の理事長に選ばれた。三期九年間にわたってこの役をつとめたが、その後、手工業管理所会頭の地位に彼が選ばれなかったことに屈辱を感じて、この役を拒絶した……九十二歳まで生きて、1888年、死のまへの年に発狂した。」（「自伝」）

ゴーリキイの記憶によれば、祖父の生年は1797年（「自伝」）であるとも、1800年（『幼年時代』）であるともされている。前者は後者によって訂正されたとみてよいが、さらに後年に至っても、ゴーリキイは次のように述べている。——「祖父は、彼がバラフナで捕虜のフランス人を見たのは十二歳のときだった、と話しました。」

しかし、イリヤ・グルーズデフが発見したバラフナ市ポクロフスカヤ教会の記録によれば、1807年度の教会記録簿にこう記されている、——《У солдата Василия Данилова Каширина родился сын Василий, крещен 17 генваря》また、エフ・ペ・ヒトロフスキイによって発見された同市のスパソ=プレオブラジェンスカヤ教会の記録には、ゴーリキイの祖父母の結婚に関する記載があり、1831年1月の項に——《Осьмнадцатого числа, Балахнинский меща-

нин Василий Васильев Каширин вступил в брак с девицей Акулиной Ивановной, дочерью нижегородского мещанина Ивана Яковлевича Муратова》とあり、さらにヤ・エム・カガーンによって発見された「1834年 度バラフナ市商人および町人身分に関する納税人口調査表」によれば、この年 ヴァシーリイが二十七歳、アクリーナは二十一歳である。これらの記録により、(i) ヴァシーリイ・カシーリンの生年は1807年であり、(ii) 彼が結婚したのは二十四歳で、妻のアクリーナは当時、『幼年時代』で述べられている十四歳ではなく、十八歳であったことが明らかだ。このことは他の資料における記述とほぼ一致するものである。

ヴァシーリイが曳き舟人足としてその経歴を始めたことは、「自伝」によって述べられているとおりと考えられるが、染物工場を経営するに至る経緯はほぼ次のようである、——彼は二十歳ですでに船頭取締をつとめていたが、1830年代の後半ともなると、ヴォルガにも汽船が登場するようになり、曳き舟業者は新興勢力の汽船貨物業者によって次第に圧迫されていった。1839年、ヴァシーリイの雇主ザヨーフは倒産して、まもなく死んだ。失職したヴァシーリイは、家族をバラフナに残したまま、ニージニイに出稼ぎに行き、姉の夫で、この地で染物業を営んでいるイヴァン・アンドレーヴィチ・モジャーロフのところで臨時雇として働き始めた。ながらく結核療養中であつたモジャーロフは1840年に死亡し、未亡人は工場経営の継続を断念して、これを弟の手に譲り渡した。こうしてヴァシーリイは、義兄の遺産を土台に染物業界への進出が可能となった。しかし、工場経営が最初から順調にすべり出したわけではなく、バラフナに残した家族をニージニイに呼び迎えるためには数年を要した。それは、カシーリン夫妻の子供たちが八番目まではバラフナで生まれ、九番目のピョートル(1843年6月生)に至って、ようやくニジェゴロートの教会戸籍簿にその洗礼日が見られるからである。

十番目の子供としてゴーリキイの母、ヴァルヴァーラが生まれたのは1844年である。彼女の誕生の頃を祖父母は年来の苦勞にひと区切りのついた時期と考えていた、——「わたしがヴァーリャを生んだあとの春がどんだけうまい具合に始まったか!」、「あの年から神さまのお恵みは筏に水がかかるように、わたらの家に流れてきた……」(『幼年時代』)

1850～1860年代は、ヴァシーリイ・カシーリンの得意絶頂の時代であつた。ニージニイ・ノーヴゴロトの公共団体や手工業界の記録によると、ヴァシーリイは1849年から60年代前半までほとんど連続して染物職同業組合理事長を勤

めたほか、1861、1862 および 1863 年においては市会議員にも選ばれている。おそらく、1863 年という年がカシーリンの運命における分水嶺であったのであろう。この年を最後に、公職や業界の役職に彼が就任したという記録は見当たらない。この年はまた、ヴァルヴァーラが父の意思に反してマクシム・ペーコフに嫁いだ年でもある。この結婚については、すでに見てきたように、結局はカシーリンも承諾せざるを得なかったし、娘夫婦を自分の家に住ませたり、またゴーリキイの遠縁に当たると称するテ・ミグーノフがいうように——カシーリンは息子たちよりも娘婿の方にヨリ多く期待したとも考えられるが、世襲貴族との縁組を願っていた彼の初志とは違う結果となったのであり、また彼が婿を多少なりと援助したとするなら、業界における彼の地位の失墜と、息子たちの離反に始まる家庭内の軋轢もまたマクシムという人間の出現にまったくかわりがないわけではなかった。成長する資本主義的紡績業の前に手工業的織物業とその関連産業が圧迫されてゆく 1870 年代、家業の衰退と家族の分裂を阻止し得ない失意といらだちが、老人の中に、かつては幸福の前兆でもあったヴァルヴァーラを彼の掌中から奪い去った人間としてゴーリキイの父への憎悪を生み出し、経済的精神的没落の進行とともにこの気持も激しく燃え上がった。それがゴーリキイの『幼年時代』における祖父の姿である。

カシーリンのその後の生活について多くを語る必要はあるまい。ここでは彼の死についてのみ簡単に触れておこう。

ゴーリキイは、祖父の死を 1889 年と考えていた。しかし、祖父の最後の地であるクナーヴィノのウラジーミル教会の戸籍簿によれば、老人は 1887 年 5 月 1 日、老衰により、八十歳で死亡した。教会戸籍簿の記載が正しいと思われるが、イ・グルーズデフの次の指摘は一考に価しよう、——「アレクセイ・マクシーモヴィチは、談話の中で、すでにネージニイにもどってから祖父と出会ったことについて回想した。」祖父死亡の 1887 年、ゴーリキイはカザン市にあって、デレンコフのパン焼き所で働いていた。彼がふたたび故郷の土を踏んだのは 1889 年 5 月初めであって、それ以前にネージニイに立ち寄った形跡はない。また、祖父が死ぬ二カ月半まえの 2 月 16 日には祖母が亡くなっており、このことについては葬式の《七週間後》、従兄の手紙によってゴーリキイは知った。祖父母が生涯の最後の時期に一緒に暮らしていなかったとしても、その居住の場所を従兄たちが知らないはずはなかった。彼らが祖父の死についてまったく知らせなかった理由は明らかでない。ゴーリキイが見かけたというのは、ただ単に、祖父に酷似した老人の姿だったのだろうか。

(2) Акулина Ивановна

「わたしもやっぱり孤児で育った。わたしのおっ母さんは貧乏な後家でな、かたわの人だったよ。まだ娘っ子だったとき、旦那がおっ母さんをおどかした。おっ母さんは真夜中、恐ろしさに窓から飛び下りて、脇腹をくぐりて、肩をひどくぶっつけてしもうた。おっ母さんは人にも知られたレース編みだったんだよ。ところが旦那方にゃ用のないものになってしもうた。それで自由をくれたのよ、——自分で好きなように暮らすかええ、とな。だが、手が無うてどうして暮らせるかえ？　そこでおっ母さんは物乞いに出た。……良かったよ、物乞いで暮らすことはの！　でも、わたしが九つを過ぎたとき、おっ母さんはわたしを連れて物乞いに歩くのを肩身せまく思うようになった、恥じてきたのよ。そしてバラフナに落ち着いた。通りを一軒一軒頭をさげて、また祭日には次から次へ教会の入口でおあしを集める。わたし、家にいて、レース編みを習う。……二年と少しで、なあ、おまえ、仕事を覚えてしまったよ。しかも町じゅう評判になってな。良い仕事があるとすぐわたしのところへ。さあアクーリャ、編棒ひと振り頼むよ！　……まもなくそこへ祖父さまが現われた。目に立つ若者だった。二十二で、もう船夫頭よ！　祖父さまの母親はわたしに目をつけていたのよ。女工だもんな、わたしは。乞食の娘だ、だからおとなしゅうするだろう、とな……」(『幼年時代』)

アクーリャ祖母さんの姿は、ゴーリキイ文学においてひとときわ光彩をはなつ、魅力あふれる芸術形象の一つとして、豊饒なロシア大地の栄養を吸収しその深奥部から生い育つ民衆の叡知、その詩的創造精神、その深い愛と忍耐力の権化として、われわれの心象のうちに大きな位置を占むるのである。しかし、彼女の実像もまた、われわれには必ずしも充分明らかとはなっていない。その生いたちについても、従来は上にかかげた彼女自身による回想からわずかに手がかりを引き出そうとする他はなかった。

ゴーリキイ市のエヌ・ア・ザブルダーエフとその研究グループによって最近発見された一連の記録文書は、アクーリャ・イヴァーノヴナの生活を知る上で重要な鍵を提供するものである。これによれば、——アクーリャの生家ムラートフに関する教会記録の最初のもものは1780年である。

アクーリャの祖父、ヤーコフ・イヴァーノヴィチ・ムラートフは、ニージニイ・ノーヴゴロトの《低郊外地》に住む《郊外地民》(посадский)であった。彼は極貧のうちに生涯をすごし、1780年に五十四歳で死んでいる。再婚による彼の妻、解放された《屋敷農奴の娘》エレナ・イヴァーノヴナは三十歳で寡婦となり、幼い子供たちを抱えて物乞いに各地をめぐり歩き、1790年になってようやく故郷にもどり、教区の救貧院《アンナ・マトヴェーエヴァの家》に身を寄せた。彼女にはイヴァンという息子がいたが、彼はやがて自活の道を開を

母を養うようになったらしく、1799年の教会記録に「母は五十歳、息子は二十三歳」という記載を見る。この年には4ルーブリの税金を支払ったという記録もある。1801年、彼はムーヒンの娘エリザヴェータと結婚した。予言者イヴァン教会の教会戸籍簿によれば、——《Генваря 21 нижегородской посадской Иван Яковлев Муратов обвенчан нижегородского посадского Симеона Фадеева Мухина с дочерью девкою Елисаветою Симеоновою. Оба первым браком. Оный брак венчал иерей Федор Михайлов и дьякон Петр Яковлев, дьячек Николай Акимов, пономарь Михаил Иванов.》とある。ここには新郎新婦の年齢が記されていないが、他の記録によりそれぞれ当時二十五歳と十七歳であったと推測される。

アクリーナ祖母さんの父親がどういう職業に従事していたか、立証することは困難である。ソヴェートの研究者によっても、「この問題に答えることはむずかしい。彼の名は不動産課税台帳にも、ニジェゴロートの《戸籍台帳》にも記載されていない、——この台帳に記載されているのは財産を所有する者に限られる。つまり、イヴァン・ヤーコヴレフ・ムラートフには家屋も商売の施設もなかったのである。彼はいっぺんも不動産税を払わなかったし、常設の営業地を持たなかったし、いかなる免許状も受けていなかった。つまり、はっきりした営業者には数えられていなかった」とされている。彼の子孫たちには別の考え方もあるが（馬具商を営んでいた、あるいは鍛冶屋で駅通つ馬具師であったという発言）、教会記録その他によって、イヴァン・ムラートフがひんばんに、長期にわたって故郷を離れていたし、また娘のアクリーナの婚礼の席にも出ていないという事実が確認されるところから、彼が行商の鍛冶工・馬具師であって、店舗をかまえたそれではなかった、と推察されよう。

アクリーナ・イヴァーノヴナは1813年に生まれたものと考えられるが、彼女の誕生と洗礼について記しているはずの教会戸籍簿はまだ発見されていない。したがって、彼女の生地や生いたちについても具体的な事実は確かめようがない。しかし、『幼年時代』の中で彼女が回想するように、少女時代の一時期をバラフナですごしたことは信じ得る。彼女は結婚の二年前に、家族とともにニージニイに移っているが、ここで彼女たちが住んだ場所は、カシーリンと縁続きのモジャーロフと同じ教区内であり、しかも1830年の「告解目録」によれば、モジャーロフの屋敷内か、その隣りにでも住んでいたらしいと想像されるのである。このことが偶然でないとすれば、バラフナにおけるムラートフ家とカシーリン家の知己が機縁となっていると考えていいだろう。

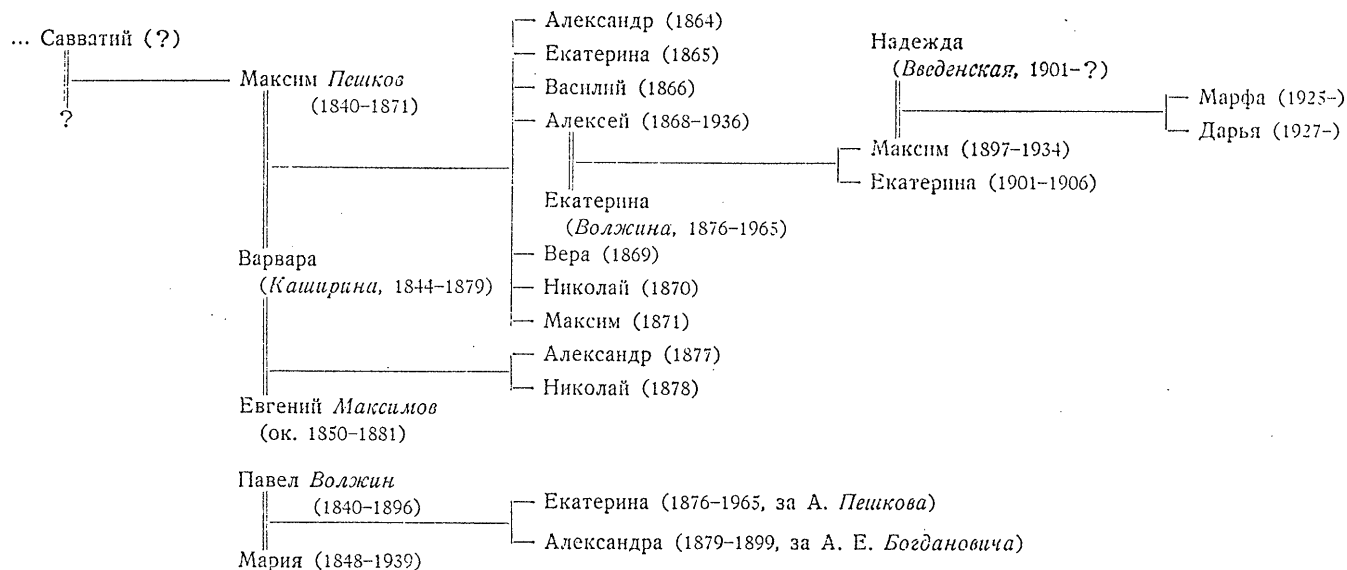
アクリーナが結婚してバラフナで暮らしているあいだに、彼女の両親は相次いで世を去った、——母は1836年、父は1840年である。アクリーナの父もまた祖父と同様、極貧のうちに一生を終え、残された娘たち——アクリーナの妹のマリーヤとマトリョーナは父の借財のために苦しまなければならなかった。マトリョーナはまもなくセルゲイ・ペトロヴィチ・セルゲーエフのもとに嫁いだが、マリーヤのほうは持病の癩癰のために生活の目途が立たず、カシーリン家の援助と他人の施しによって世すぎをした。今日残っている記録の中には、生活費補助を市会に願い出ている《未婚のマリーヤ・ムラートヴァの切なる嘆願》があるが、これは義兄であるヴァシーリイ・カシーリンが代筆したもので1845年の日付けがあり、これによっても彼女の貧窮状態が明らかである。

以上見てきたように、本節の冒頭にかかげたアクリーナ祖母さんの回想における彼女自身とその母親の経歴は、教会記録その他が立証する事実といちじるしく食い違うものである。彼女は、自分の父親については、あたかも彼が最初から存在しなかったかのように一言も触れていなかったが、実際には父親は、彼女の結婚後十年近くも生き続けた。母親についての彼女の言葉には、彼女の祖母、母、母妹マリーヤの経歴の混同が存在するように思われる。アクリーナの母は兵士の娘であって農奴の出ではなく、貧乏ではあっても乞食ではなかった。彼女の祖母が解放農奴であって、早くに寡婦となり、ながい年月乞食をし教会の救貧院で暮らしたのである。そして不具であったのは妹であった。しかも、マリーヤについてはカシーリンの一族はみな良く知っていたはずだ。『幼年時代』における祖母の言葉を通しての曾祖母の形象が、下層社会の女の集合的形象として作家によって意識的に作り直されたのか、あるいは祖母または作家の記憶の誤りであったのか、あるいはその双方を含むのか——解明することは困難である。ゴーリキ自身は後年の書簡においても、アクリーナ祖母さんが「孤児であった。私生児だったということも有り得ます」と述べているのだが。

アクリーナ・イヴァーノヴナは、晩年には、子供たちに見捨てられたまま、施し物を集めて暮らした。彼女の死について教会記録は記している、——《Февраля 16-го 1887 года умерла, а 18 февраля 1887 г. погребена на городском кладбище нижегородская мещанская вдова Акулина Ивановна Каширина, 70 лет, от старости. Священник Воскресенской церкви на Яриле А. Кармазинский》実際には、彼女は《七十歳》ではなくて七十四歳であったし、《寡婦》ではなく、別居していたにせよ、夫はまだ生きていたし、

Ⅲ 家 系 図

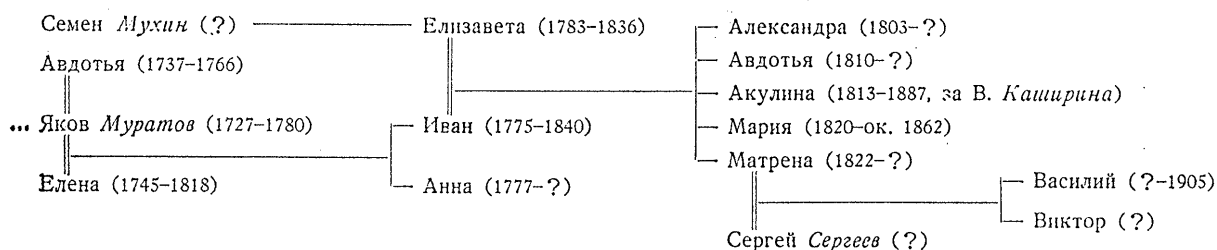
1. ПЕШКОВЫ



2. КАШИРИНЫ



3. МУРАТОВЫ



- 【備考】 1. 斜体は姓を示す。
 2. 括弧の中の数字は生年および没年。
 1) (?) は生没年ともに不明。
 2) (?-1905) は生年不明。
 3) (1777-?) は没年不明。

夫は《町人》ではなく同業組合員であった。この記録における誤記は、おそらく、彼女の身寄りが誰ひとり葬式に立ち会わなかったことから生じたものであろう。

ゴーリキイは、自伝的中編『私の大学』の中で、祖母の死について次のように書いている、——「祖母が死んだ。私は彼女の死について、葬式の七週間後に、私の従兄から送ってきた手紙によって知った。短い手紙の中には——句読点なしで——祖母が教会の玄関のところで、施しを集めながら、倒れて足を折ったと書いてあった。八日目に《脱疽にとつつかれた》。もっと後になって私は、二人の兄弟と子もちの妹——健康な若い人たち——が老婆の首にかかり、彼女の集めた施しで食っていたということを知った。彼らは、医者と呼ぶだけの知恵を持ち合わせていなかったのだ。」この文章のすぐ後に《句読点なしの手紙》の一節が引用されているが、それは次のように判読できる、——「祖母さんをペトローヴロフスキイに埋めた　そこでは仲間のものがみんなで見送った　私たちが乞食たちとが彼女を好いていて泣いた。祖父さんも泣いて　私たちを追い出し　ひとりで墓場に残った　私たちは木の蔭から彼が泣くのを見ている　あの人も長いことはないだろう」　葬式に祖父やカシーリン家の人びとが列席したことを証明する資料はない。七週間もたってから手紙が送られたということは、ゴーリキイの従兄が祖母の葬式の模様を人づてに聞いたのではないかと疑わしめる。ゴーリキイの回想はつづく、——「私は泣かなかった。ただ——思いたす——まるで氷の風に私が捕えられたようだった。夜、裏庭の薪のやまの上に坐って、私は、祖母について、彼女がどんなに心から賢く、すべての人びとにとって母であったかについて、誰かに語りたという執拗な願望を感じた。しかし、誰も話す相手がないので、それらは語られずに燃え尽きてしまった。」

祖母の死後八年たった1895年12月、ゴーリキイは『サマーラ新聞』に『アクリーナ婆さん(スケッチ)』と題する作品を発表し、その中で、おそらく、ネージニイ滞在中(1892年10月～1895年2月)に調査したと思われる資料に基づいて、「ザードニャ・モークラヤ通りの博愛の人」で、「施しを集め、副業として稀には、機会があれば、すこしは盗みを働き」、「つねに五人から十人もの《孫たち》を養っていた」アクリーナの不慮の災難と非業の死の模様を描き出している。彼女の埋葬に立ち会った巡査のニキフォルィチは、《孫の》一人で、《弁護士》と呼ばれる男に語る、——「婆さんは、おまえたち、ろくでなしにとって——母親だった。婆さんは酒飲みだったが、これはどうってことは

ない。盗みをした——これもおまえたちのためだ。わかるかい？ だからこうやって、おれはこの人の野辺送りに来ているのだ、おまえもそうだろう。それに、もしもおれがここに派遣されなかったなら、頼んででも婆さんを見送りに駆けつけたさ……この人には心というものがあつた。わかつたか？」

それからさらに十数年を経て、ゴーリキイの中にふたたび明るい炎となって燃えあつた《執拗な願望》は、「すべての人にとって母である」ところの、世界文学においても最も魅力ある形象の一つを生み出したのである。

カシーリンの子供たちと親戚について触れる余裕はない。ここでは、アクリーナが十七人の子供を生んだが、そのうち育ち上がったことが確認できるのは三人だけ——長男ミハイール、四男ヤーコフおよび、ゴーリキイの母である四女ヴァルヴァーラ——であること、長編『母』の女主人公、ペラゲーヤ・ニーロヴナの原型アンナ・キリーロヴナ・ザローモヴァはカシーリンと縁戚にあたり、彼女は少女時代にヴァルヴァーラと親しい関係にあつたということをつけ加えるにとどめる。

主要文献

- (1) М. Горький. Собрание сочинений в 30-ти томах. Гослитиздат, М., 1949-1955.
- (2) Н. А. Забурдаев. Бабушка и отец А. М. Горького. Горьковские чтения 1968. Изд. «Наука», М., 1968.
- (3) И. Груздев. Горький и его время. ГИХЛ, М., 1962.
- (4) Переписка Горького с Груздевым. Изд. «Наука», М., 1966, (Архив А. М. Горького. т. XI.)
- (5) Летопись жизни и творчества А. М. Горького. Вып. 1. Изд. АН СССР, М., 1958.